

【参考：2020年3月発表『PERSOL Work-Style AWARD 2020～はたらいて、笑おう。～』受賞者詳細】

【アクティブシニア部門】西本 喜美子（写真家）

「92歳のインスタおばあちゃん。行き当たりばつたりの人生を楽しみ、今を生きる考え方とは」



72歳のときに長男が主宰する写真講座「遊美塾」に参加し、初めてカメラに触れる。82歳のときに熊本県立美術館分館にて初の個展を開催。遊美塾の宿題に提出した自撮り写真が話題になり、フォトエッセー「ひとりじゃなかよ」が出版、2017年熊日出版文化賞を受賞。2016年に世界的企業 adobe 社の 2017 年年賀状キャンペーンのアートディレクターに就任。2019年12月、広島県廿日市市 はつかいち美術ギャラリーにて個展を開催し来場者数の新記録を達成。

<選考委員会より>

90歳を超えても、年齢にとらわれず、「おもしろそう」と新しいことに挑戦し続ける。「人生100年時代」を体現するアクティブシニアです。

【ふるさと貢献部門】黍原 豊（一般社団法人 三陸駒舎 理事）

「誰かを笑顔にする仕事は、自分を幸せにする。被災地でゼロから始めたホースセラピーで子どもを笑顔に」



2013年、東日本大震災がきっかけで奥さんの実家のある釜石に移り、子どもの支援活動を開始。ストレスを抱えて暮らす子どもたちが馬との交流を楽しむ「ホースセラピー」を通じて、心から笑っている子どもたちの姿を見て、被災地の心の復興には、馬の力が不可欠だと感じ、これを地域でやっといこうと決意。2019年はのべ約900名の子どもたちにセラピーを提供。馬と接する中で子どもがいきいきとした表情を見せるようになり、保護者からたくさんの感謝や喜びの声が上がっ

ている。

<選考委員会より>

ホースセラピーを通じて子どもたちの笑顔を増やし、その家族や地域を元気にする活動はとてもユニーク。地域の魅力や価値に目を向け、ふるさとの活性化に貢献しています。

【パラレルキャリア部門】Drまあや（脳外科医兼ファッションデザイナー）

「死ぬ瞬間『おもしろかった』と満足できる人生に。」

脳外科医とファッションデザイナーを両立する全カパラレルキャリア



3歳から両親の元を離れ、開業医だった祖父の元へ行き、祖父母に育てられる。祖母の勧めで、医師を目指す。脳外科医として10年勤務していたが、幼少時から興味があったファッションデザインの勉強をしにロンドンへ留学。帰国後に、医師としての仕事の傍ら、ファッションデザイナーとして活動を開始。2013年「Drまあやデザイン研究所」を設立。2019年10月に、バンクーバーファッションウィークのランウェイで、初めて作品発表を行った。

<選考委員会より>

肩書は複数あっていい、をパワフルに体現。多忙な医師とファッションデザイナーを両立し、形にとらわれず、さまざまなたらき方を全力で実践されています。

【ダイバーシティ部門】森田 かずよ（義足の女優・ダンサー）

「自分の体だからこそ表現できることがある。私が『義足のダンサー』として踊り続ける理由」



先天性脊椎側彎症、二分脊椎症などの障害を持って生まれる。高校時代に観たミュージカルがきっかけで表現の世界へ憧れ、芸術大学や劇団に応募をするが、障害を理由に断られた経験から一念発起。「踊ることは、自分の身体と向き合い表現すること。それは障害者も健常者も同じである」という理念を持つ。現在、日本国内のステージだけでなく、韓国、シンガポールなど海外のフェスティバルも含め、数多くの公演に出演。

<選考委員会より>

障害の有無にとらわれず、やりたいことができる方法を探し、挑戦する。女優・ダンサーとして、自分にしかできない表現を追求し続けています。

【グローバルチャレンジ部門】 三輪 開人 (NPO法人 e-Education 代表)

「映像教育で途上国の学びの格差をなくす。貧しい若者に可能性を与え、未来を共創したい」



「最高の教育を世界の果てまで」をミッションに途上国で教育支援を行っている。大学在学中、バングラデシュを訪ねた際、教師不足により十分な教育を受けられない子どもたちの様子を見て、映像授業こそが彼らを救うと「e-Education」を仲間達と一緒に立ち上げる。2016年、Forbes Asia が選ぶ「30 UNDER 30」に選出される。現在、10年連続バングラデシュ国立 No.1 大学の合格者を輩出中。

<選考委員会より>

映像授業を通じて、バングラデシュで貧しい農村から難関大学受験合格者を生み出す。自国の枠を超え、世界で挑戦し活躍しています。

【ネクストキャリア部門】 岡本 祐季 (鉄装飾家artist・鍛冶師)

「証券営業から鍛冶職人へ。女性の鍛冶職人として、大好きなものづくりで勝負する」



広島のカフェで出会った鉄製シャンデリアに一目惚れし、作者の鍛冶職人に弟子入りを志願。それまで勤めていた証券会社の営業職を辞し、それまで「女性には縁遠い」と言われていた鍛冶の世界へ飛び込む。故師匠の元で10年間修行し、独立。広島のアトリエを拠点に照明などのインテリアから大型のオブジェまでさまざまな作品を手掛け、国内外で活動を行っている。2019年には広島国際映画祭のトロフィー制作も手掛けた。

<選考委員会より>

大好きだったものづくりを仕事に。未経験でも、時間がかかってもあきらめない。はたらく環境やステージを変え、さらなる飛躍や成長を遂げています。

【キャラクター部門】 飛電 或人 (「仮面ライダーゼロワン」)

「AI 搭載人型ロボットに育てられ、お笑い芸人から AI テクノロジー企業の二代目社長、

さらに仮面ライダーゼロワンに転身。追いつけているのは『人を笑顔にする』という夢」



飛電インテリジェンスの創業者にして、人工知能搭載人型ロボ「ヒューマギア」を開発した飛電是之助を祖父に持ち、父・飛電其雄はヒューマギアという異色な環境で育つ。幼少期から人々を笑顔にするという夢を持ち、お笑い芸人を目指し活動するも、是之助の死去に伴い、飛電インテリジェンスの代表取締役社長に就任することになった。それと同時に仮面ライダーゼロワンとして、人々やヒューマギアの安全を脅かす者とも戦い続けている。「ヒューマギアは人間と心を通わせる夢のマシン」と強く訴え、人々の夢を応援する企業のあり方を常に模索している。

<選考委員会より>

「多くの人を笑顔にしたい」を軸に、芸人、社長、ヒーローと転身。はたらく方の多様性を実現し、インパクトや感動を与えています。